

Glocal Tenri



6

月刊 グローカル天理 Monthly Bulletin Vol.14 No.6 June 2013

天理大学 おやさと研究所 Oyasato Institute for the Study of Religion, Tenri University

CONTENTS

- 巻頭言
マラソンブーム
／深谷忠一 1
- 天理教伝道史の諸相 (18)
熊本、長崎、佐賀の天理教
／早田一郎 2
- 「おふでさき」の有機展開 (14)
第三号：第十九首～第三十七首
／深谷耕治 3
- フランスで育つ日本人の子供たちへの
日本語教育 (6)
天理日仏文化協会こども日本語講座の
取り組み⑥
／田中久代 4
- 新宗教のブラジル伝道 (2)
ブラジルの宗教風土②
／山田政信 5
- 「いのち」をつなぐ—生死の現象 (18)
死をどのように考えてきたのか⑨
／堀内みどり 6
- 「髷のあわいに深く入り込んでいって…」
をめぐって (9)
髷のあわい—その火口⑨
／松田健三郎 7
- ノーマライゼーションへの道程 (16)
福祉のまちづくり③
／八木三郎 8
- ヴァチカン便り (2)
新法王フランチェスコ就任
／山口英雄 9
- 平成 25 年度公開教学講座「信仰に生
きる」：『逸話篇』に学ぶ (2)
第 1 講：19「子供が羽根を」
／佐藤浩司 10
- 図書紹介 (75)
『北海道のサンショウウオたち』
／佐藤浩司 11
- English Summary 12
- おやさと研究所ニュース 13
「教学と現代 9」(海外伝道特別講座) 報告：第
4 回/第 258 回研究報告会/「生殖テクノロジー
とヘルスケアを考える研究会」公開報告に参加
／京都大学「ライフサイエンス」研究シンポジ
ウムに参加/第 259 回研究報告会/新刊案内/
平成 25 年度公開教学講座開催のご案内

巻頭言

マラソンブーム

おやさと研究所長 深谷忠一 Chuichi Fukaya

現在日本では、参加者 5,000 人以上の市民マラソン大会が、北海道から沖縄までの各地で年間 156 回 (公認 67 レース) 開催されていて、それらの大会への参加者は延べ 150 万人を超えます。(計測工房 info@keisoku-kobo.co.jp)

その中でも最大の大会である東京マラソンでは、3 万 6,000 人の定員に対して 10 倍の 30 万 3,500 人も参加申込みがあり、10 万円以上寄附をする特別枠での出走者も 2,215 人 (寄付総額 2.2 億円) を数えました。また、この大会を支える 1 万人のボランティアの募集も、大会の 3 カ月前には締切りになり、2 月 4 日の大会当日には、173 万人もの観衆が沿道を埋めました。

また、日本人のランナーは国内だけではなく海外にも進出していて、2012 年のホノルルマラソンには 1 万 6,000 人以上が参加。その他世界の名立たる大会にも数百人単位の日本人が参加しています。

現在、日本の市民ランナーの推計数は 600 万人以上。週 1 回以上走っている人は 279 万人に達する (SSF 笹川財団「スポーツライフに関する調査」といわれますから、野球選手の 500～600 万人、サッカー選手の 95 万人余を抜いて、現在日本で最も多くの人々が参加しているスポーツだといえましょう。

日本で何故これほどのマラソンブームが起きているのか? その第一の原因は、未曾有の長寿社会の出現です。周りの人たちが元気で長生きするのに刺激を受けて、自分も何か健康によいことをやるべきだと考える。それで、多くの人々が、道具はいらぬ、グラウンドや体育館もいらぬ、相手もいらぬ、夜昼何時でも OK、誰にも気兼ねなく自分の力量・ペースで行えるウォーキングやジョギングをやりだした。そして、その中、ウォーキングやジョギングだけでは物足りなく感じた人たちが、本格的に走り出したのです。

そして、身体の健康のために走り始めた人たちが、走ることが精神の健康にも良いことを知った。文明の機器で囲まれた人工の空間から飛び出し、大空のもとでひたすら走ることに、日々のストレスを発散してリフレッシュすることを味わった。それでますます走ることにのめり込んでいったのです。

そして、さらに走り続ける中に、「ランナーズハイ」といわれる高揚感・快感も味わうようになった。これは「中程度ないし強度の有酸素運動中に、エンドカンナビノイドと呼ばれる天然の化学物質が脳内の『快感』関連領域で作用するときに生じる」(National Geographic News May 11, 2012) といわれる本来は生理的な現象ですが、当人にはある種の宗教的悟りの境地に達したかのような感覚にも思われて、それが単調なランニングを繰り返して行う原動力になっていくのです。

さらには、日本には、神輿を担いだり山車を引いて街中を練り歩く祭りの伝統があって、誰もが一度は沿道から手を振った経験があります。それがマラソン大会に出れば、自分が観衆から手を振ってもらう立場になれる。また、加えて、マラソン大会では開催の目的に各種のチャリティが謳われたりしますから、参加することで福祉活動に寄与している気にもなれる。つまり、自分の健康のためにウォーキングやジョギングの延長として始めたランニングが、マラソンに参加することで人々から賞賛されるものにもなる。それで、ますます多くの人々がマラソン大会を目指すようになったのです。

以上が、ノン・ランナーの筆者が推測するマラソンブームの要因ですが、しかし、これだけでは、日本中で 150 以上ものマラソン大会が開かれ 150 万人ものランナーが参加することや、一つの大会に 1 万人のボランティアと満員の甲子園 40 回分の観衆が集まる事実についての説明としては十分ではないでしょう。他にも、「人間は狩猟生活をして生き残るために、200 万年も前からしなやかな腱や短い前腕などの身体的な適応をして、長距離を走れるように進化した」(National Geographic News May 11, 2012) という、マラソンを走りたくなるのは人間の本性だという説もありますが、その反面、自然が豊かな地方での大会より、大都会の真ん中を走る大会の方が大勢の参加者を集めるという事実もあります。

いずれにしても、マラソン大会がかくも大勢の人を集める要因をさらに探求すれば、他の組織・グループやイベントの活性化のためにも役立つのではないかと考える次第です。